

## 意識的現象の原理を探る

大橋雄太郎(OOHASHI YUTARO)

元 システムエンジニア

意識が物質である脳から生まれてくるということが、一般的に認められるようになり、いまや問題はその物質である脳からどのようにして、あの意識的現象（痛みや色といったクオリア）が生まれてくるのかというところへ移っている。しかしそれにもかかわらず、このクオリアの説明に切り込むことは困難を極めている。例えば、ジュリオ・トノーニは、意識は情報が区別されたまま統合されたものだと主張する。そして、この多くの情報が区別されたままひとつに統合されるという考え方は、意識を理解するうえでの素晴らしい提言であっただろう。それにもかかわらず、彼の説明からはクオリアがどのようなものであるかが、いまひとつ見えてこない。その理由はおそらく、彼が基本となる情報というものについてほとんど説明していないからだと思われる。彼は情報を基本としてクオリアを説明しているのだが、その説明自体が情報という言葉のクオリア的要素を利用して説明しているように思われる。その証拠に、ジュリオ・トノーニ自身は、おそらくクオリアを十分に説明していると考えているのだろうが、彼のよき理解者であるクリストフ・コッホは、彼の理論（情報統合理論）を十分に理解しながらも、意識の根本的な在り処を汎心論に求めているのではないか。

このように、ひとつの解答を与えると、クオリアはその解答をするりとすり抜けてしまうようなものなのだ。では、この難題に足がかりを得るにはどうしたらよいであろうか。それにはまず、クオリアそのものがどのような性質を持っているのかを、根本的な部分で充分に見直す必要があるだろう。そして、それをまとめることにより、自ずとクオリアの説明方法が浮かんでくることを期待する。ここでは、その試みとして、以下の項目について考察する。（以下、現象は意識的現象を示す）

- (1) 現象は瞬間的に現れて消えるのではなく、少なくとも数秒は持続する
- (2) 現象は、その現象するということによって、一定の固定した意味を表出する
- (3) 現象が意識されるのは、まさに現象が発生するその時その場所である
- (4) 現象はそれ自体が現れるのであって、誰かが見たり感じたりするからではない
- (5) 現在の現象の中には過去の現象が含まれている
- (6) ある特定の現象を示すためには、そのある特定の現象を利用する以外に方法はない
- (7) 現象を実現する物理的な構造は、以上のことを自在に表現できるものでなくてはならない

以上のことを考察することにより、意識的現象の原理を探る。